
キノの旅 綺麗な国

もず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キノの旅 綺麗な国

【Nコード】

N5925V

【作者名】

もず

【あらすじ】

キノの旅の習作です。

まるごと本家のパクリといわれても仕方ないレベルですね；；

前回は連載途中で投げ出しちゃったので、今回は短編にしました。

誤字脱字がありましたら、連絡ください。

見渡す限りの青空に赤く見えるほど照りつける太陽が浮かんでいた。白みがかった砂漠砂の広がる高原を一台のモトラドが遠慮の無い爆音をたてて走っていた。

後輪の両脇と荷台に旅荷物を積んだモトラド（注・二輪車。空を飛ばないものだけを指す）で、その上には、顔を防砂マスクで覆いゴーグルを掛け、薄手の黒いジャケットを羽織った若い人間が一人乗っていた。腰を締めた太いベルトにはいくつかのポーチが付いている。

右腿にはハンド・パースエイダー（パースエイダーは銃器。この場合は拳銃。）のホルスターがあった。

八角形のバレルを持つ、リヴォルバーが窮屈そうに、がたがたゆれている。

「暑い。」

上の人間のほうから、後ろ向きな感想がため息と同時に出てきた。声は高く、少年のように聞こえる。

「地面のほうが熱い。」

下のモトラドのほうから、力なく反撃の声が聞こえる。声は一層高く、男の子といったところのようだ。

「疲れたんだったら休もうよー、キノったらまったく懲りないんだから。モトラドはね、スポーツなんだよ。だから疲れてたらミスするし…」

「うんうん、わかってるんだエルメス。でもね僕にはもう少しな気がするんだ。もうすぐで着く気が…」

キノと呼ばれた人間がさえぎるようにそういった。そしてひたすらにまっすぐな、道と叫べない粗末な行路を進んでいく。

エルメスと呼ばれたモトラドはあきれながら、

「もー。次の国はどんな国なの？近いの？」

「うん、近いはず。ほんとに寄るつもりは無かったんだけどね。乾季になったからね、仕方なく。」

「キノがそんな事いうなんて珍しいね。」

「まあ。変なうわさしか聞かないところだからね。さっぱり出来るシャワーとやわらかいベッドがあれば文句はいわない。」

「ふーん、どんなうわさ？」

「賛否両論。とても印象深かったって言う人とか、あの国で印象にのこったものなんて舗装された道路ぐ」

らいだって言う人も。」

高い城壁にある大きな門の前。小さな詰め所に番兵が一人いた。

キノたちの姿を認めると、詰め所から出てきた。その顔は整っていはつらつとしていた、ドアを勢いよく開けて、大きな声でうれしそうに

「ようこそ旅人さん！入国を希望ですか」

右手を振り回しながら、一枚の書類を左手に持っていた。

「はい、三日ほど。あと、このモトラドも。」

キノは番兵の前にエルメスを止め。ゴーグルをとりながら返事をした。

「こちらにどうぞ。わたしはコムです、よろしくお願いします。」

番兵は詰め所に戻ってペンを取り出し、書類と一緒に長机の上においた。

「必須事項以外は適当でかまいません。モトラドは許可なしでも入

国できるんですが、パース・エイダーは有段者の方でない…」

心苦しそうに番兵がキノのほうを見た。

「大丈夫だよおっちゃん！こう見えてキノは有段者なんだから！」

顔を明るして番兵がこちらをみた。

「でしたら問題ありません！書類の下のほうの有段者の欄にチエツクをつけて置いてください。」

「おっちゃん、この国って変な国なの？」

言い終わった瞬間にキノの裏拳がエルメスの座席にあたり、ぼふつと音を立てる。

「痛いなーキノ。率直に聞いたただけなのに。」

「うるさい黙れ。すいません、気にしないでください。」

不満そうに文句を言うエルメスを尻目に、キノは番兵に謝った。

「大丈夫です、気にしてません。確かにこの国は変ですね。他の国の人から見ると、特に。」

「なにがへんなのさ。」

番兵の返事を聞いて、エルメスはわくわくしながら聞き返した。

「美容整形が盛んなんです。町に入ったらびっくりしますよ。」

番兵は乾いた笑いを飛ばし、城壁の向こうをサムズアップで指します。キノが番兵のほうを向いて、

「美容整形なら最近ではいろいろな国で見ます。なぜそれで…」

「限度つてものを超えたんでしょうね、町では太っている人も肌が荒れてる人も不細工な人もいません。」

いるのは美男美女です。私の顔をよく覚えていたら多分似た人に出会いますよ。けっこういっぱい。」

「入るのが楽しみになってきたねキノ。」

エルメスがキノに同意をもとめる。

「…楽しみだね。」

整備された道を進む、少し日が傾きだんだんと暮れてきた。緑地公園が所々にあり、整形をする国だけあってお金にゆとりがあるのが分かる。

キノはエルメスを押しながら公園内をゆっくり歩いていた。時間が時間なだけあって人通りはなかなか多かった。

「あの番兵さん言うとおりだ。」

「まったくだね。予想以上に美男美女ばかりじゃん、あ、似てる人発見。」

「何人目？」

「この公園に入ってから3人目かな。ん？わかんなくなってきた。」

キノとエルメスが歩きながらしゃべっていると大きなベンチが在ったので座ることにした。

道をはさんだところからしわの刻み込まれた初老の男性がこちらに歩いてきた。

「旅人の方かな？」

隣を？と言ってきたのでキノは少し反対側に寄って、どうぞ、といった。

「わたしはコッソと申します。観光にいらっしゃったのかな？それとも……」

「いえ、近くに來たので観光に。」

コッソという老人はゆっくりうなずいた。

「そうですか、奇妙な国でしょう？この国の者は己に自信が無いから見た目ばかりを気にして、わしが50の半ばの頃にはこうなっております。」

下を見ながらコッソは何かを吐き出すようにそついった。

「コッソおじいちゃんは整形反対派？」

エルメスがまたもや直球に質問をした。

「若い頃はの、今ではもうなれたよ。同じ顔ばっかりになったとしても驚かんでしょうな。気持ち悪いことこの上ないですがね。」

そついうとコッソはゆっくり周りを見渡した。

「今と大差ないでしょうし…」

大きな道沿いにあるカフェに入ると横にカップルが居た。

お似合いカップルといったような見目のよさだった。

「この国で甘いものってなにがおいしそうだろ？」

「キノ、そういうときには地元の人に聞けばいいんだよ。ねえお兄

さん」

そういつてエルメスがカップルの男側に話しかけた。

「旅人さんですか？」

男がキノに向かって返事をした。

「ヨツスムなに言ってるのよ。どう見たって旅人でしょ。」

「はい、そうです。西の方からきました。横にいらっしやる女性は……」

「こいつは彼女、チュンって名前。何か困ってるの？」

「キノってばさっきからずっと、どれが一番甘くておいしいか、で迷って迷って決められないの。お姉さんどれがお気に入りか教えてあげてよ」

「そうね……」

キノが注文できたのは夜になってからだった。

安いホテルを見つけて、業務用エレベーターを借りてエルメスを部屋に持て行ってよいか聞こうとフロン

トに行くと、ナチュラルメイクの若くて綺麗な女の人が受付にいた。

「あら、旅人さんね。私たちの国へようこそ！シングルかしら？」

「はい。出来ればこのモトラドを部屋に上げたいのですが…」

「ごめんなさい、倉庫なら大丈夫なんだけど…」

「分かりました。エルメス、明後日には出るからその時まで倉庫に入ってて。」

キノが首肯したので、女の人が立ち上がる。

「キノってば薄情だなー」

エルメスが文句をたれている。

キノがエルメスを押して歩くと、女の人が受付の右側の通路を指差した。

「わたしの名前はソムよ。よろしくね」

「よろしく願います。……あなたは…、整形してませんね。」

女性は、はっとキノのほうを見て、

「よく分かったわね。ほとんどみんなと変わらないでしょ？わたし整形モデルになったことがあるから、似たような人がいっぱい居たはずだし。」

「たしかにかなり見分けはつきづらいです。でも、メイクが違います。この国の人はメスの後を隠すようなファンデーションの塗り方なのに、あなたは…違います。その点で。」

「へえー、言われるまで気付かなかった。よくわかったねキノ。」

エルメスが下から受付の女性の顔を眺める。

すぐ横を受付の女の人と同じ様な顔をした従業員が二人通り過ぎていった。

エルメスはエレベーターに乗せられながら、ばいばーいといって上の倉庫に行った。

「プチ整形でもしてみたら？旅人さん、ただでさえかわいいから、ちよつといじるだけでもつとかわいくなるわよ。2時間ぐらいで終わるし。」

「考えておきます。」

すぐ横を受付の女の人と同じ様な顔をした従業員が三人通り過ぎて

いった。

エルメスは、キノと受付の女性を残してエレベーターであがってき、降りていた。

「なんともほこりっぽいところだね。いやになっちゃう。」

そのまま翌々日まで、倉庫ではなにも動かなかった。

倉庫にがんがんと金属をたたく音が響く。騒音公害なんてお構いなしの大音量。

「キノにはやさしく起こすっていう重要なスキルが欠如してるよね。」

「起きないのが悪い。もう時間だ、行くよ。」

センタースタンドを倒し、倉庫を出て、ホテルのフロントから外に歩を進めていった。

「また立ち寄ることがあったら、ここにとまってね。」

茶目っ気たつぷりのウイंकでキノ達を送り出した。

見渡す限りの青空に赤く見えるほど照りつける太陽が浮かんでいた。白みがかった砂漠砂の広がる高原を一台のモトラドが遠慮の無い爆音をたてて走っていた。

「そっいえば、プチ整形したんだけど。気付いた？」

「うそでしょ？ほんとに？」

「なんちゃらウルトラパック&ヒアルロン酸なんちゃら……、名前わすれた。」

「名前ぐらいおぼえときなよー」

「長かったもんだから…つい」

「変わったかな？わかんないけどな」

「まあ、そんなもんだ。名前も覚えれない程度のことだったんだ。」

「あ、そういえばあの国で名前を覚えれたのコッソおじいちゃんだけだったね。」

(後書き)

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5925v/>

キノの旅 綺麗な国

2011年10月8日23時24分発行